

元駐ルーマニア大使小崎昌業氏オーラルヒストリー(一)

－青島・上海・南京時代から外務省入省まで

金子 貴純

はじめに

本稿は、2014年10月10日から2015年2月25日までの計5回、及び2016年9月23日に追加で行った、元駐ルーマニア大使小崎昌業氏おさきまさなり（以下、「小崎大使」）のオーラルヒストリーである。小崎大使は、戦前に上海にあった東亜同文書院大学のご出身であり、外務省入省後は、中華民国を皮切りにインドやカナダ、そして特命全権大使を務められたモンゴルやルーマニアなど、世界を舞台に活躍された。また、通産省出向時代には、日米両国民の耳目を集めた繊維交渉に従事されるなど、戦後の日本外交史に残る重要局面に当事者として関わってこられた。

外務省退官後は、霞山会の常任理事や愛知大学東亜同文書院大学記念センター運営委員などを歴任され、さらには『東亜同文会史 昭和編』（霞山会、2003年）の編集にも携われた。また講演を通じて、ご自身の貴重な経験を次代に継承しようと精力的な活動を今日も続けておられる。

以下に小崎大使の略歴を掲げる¹。

1922年	中国・青島に生まれる
1940年	滋賀県立水口中学校卒業
1941年 4月	東亜同文書院大学予科入学
1942年 10月	東亜同文書院大学商学部入学
1943年 12月	南京 61 師団に入隊
1944年 3月	南京陸軍經理学校入校

1 小崎昌業『小崎外交官、世界を巡る 東亜同文書院大学、愛知大学から各国大使・公使としての軌跡』（あるむ、2016年）を参照。

1946年 5月	帰国
1946年 9月	東亜同文書院大学商学部卒業
1947年 5月	愛知大学法経学部経済科入学
1948年 3月	愛知大学法経学部経済科卒業
1951年	外務省入省
1952年	アジア局二課
1953年 4月	在中華民国大使館
1956年 3月	アジア局一課
1956年 8月	通産省通商局搬入一課
1960年10月	在カルカッタ総領事館領事
1963年10月	在カナダ大使館一等書記官
1965年11月	経済協力局賠償課
1967年 1月	経済協力局技術協力課長
1968年 3月	情報文化局文化事業部文化二課長
1971年 1月	通産省繊維雑貨局繊維雑貨搬出課長
1972年10月	外務省研修所首席指導官
1974年 2月	在シンガポール大使館参事官
1976年 3月	在ポーランド大使館公使
1980年 2月	在マドラス総領事
1982年 9月	在モンゴル特命全権大使
1984年 9月	在ルーマニア特命全権大使
1987年12月	外務省退官

愛知大学東京霞が関オフィスで行われたインタビューは、非常に穏やかな雰囲気の中で行われた。小崎大使は、全インタビューを通じて、事実関係に少しでも疑義があると、書籍や記録を調べた上で、後日改めてお答えくださるなど、終始正確な歴史的事実を我々に伝えようとしてくださった。

ここであらためて、インタビューに快く応じてくださった小崎大使に、

心より感謝申し上げたい。

さて、このインタビューは、中国・青島で過ごした幼少期から東亜同文書院大学入学、学徒動員、帰国後の外務省入省、入省後の国内外における種々の業務を経て、通産省繊維雑貨搬出課長として繊維交渉に奔走された時代までを対象としている。紙幅の関係上、以後、今回を含めて三回に分けてインタビューの全てを掲載する予定である。また、解説については別稿を用意したい。

本稿では、主に中国で過ごした戦前期から、戦後の外務省入省までの時期を掲載する。東亜同文書院大学で送った青春の日々を懐かしむ小崎大使のお話しは、聞く者をして、現代ではほぼ失われた「バンカラ」な往時の大学の風景を想起させる。また、終戦後に中国側との連絡に従事した経緯は、終戦から復員を対象とする歴史学の研究の観点からも貴重な証言であろう。

末尾になるが、インタビューの実施にあたり、全回にわたって場所を提供してくださった、愛知大学東京霞が関オフィスの夏目益良所長に深く感謝したい。

なお、各インタビューにおける質問事項の作成などにつき、武田知己先生にご協力いただいた。

インタビュー内容

(以下、〔 〕で記載している箇所は筆者が適宜追加した内容を示す。)

第1回

- ・日時：2014年10月10日 15:00～17:00
- ・場所：愛知大学東京霞が関オフィス
- ・インタビュアー

武田知己 (大東文化大学法学部教授)

金子貴純 (大東文化大学大学院法学研究科博士課程前期課程1年)

■中国・青島で過ごした幼少期

—— いずれは外務省に入られてからのお話しがメインになりますが、今日は第1回目ということで、お生まれになった頃のお話からお伺いします。大使は1922年に青島でお生まれになったということですが、これはご両親のお仕事の関係でそうなったのでしょうか。

小崎 そうです。父はもともと滋賀県の出身で、家が裕福でして、妹が4人おりました。長男でした。そして京都の騎兵連隊に入りました。お酒を飲んだり、馬にのったりしていたのですが、青島をドイツから日本が引き継いだ時、それに乗じて日本人がたくさん現地に行きました。そして現地で馬を買って、友人と馬を乗り回していました。

—— お父様は青島でお仕事をされていたのですか。

小崎 父は貿易の仕事をしていました。父は日本にいる間に結婚しておりまして、青島にわたった後の1922年に私は生まれました。青島には日本人がたくさんいました。私は青島で幼稚園に行っておりまして。そこには日本人だけで4、50人の子供がいました。

—— 青島には租界があったのですか。居留地ですか。

小崎 租界はなかったです。日本人が住む地域は特定の場所に集中していましたが、となりが中国人の家だったり、外国人も入り混じったりしていました。

—— 日本人街があったわけではないのですか。

小崎 そうですね。ただ日本人がいる街には日本人らしい名前を付けていました。小さいころ、父に連れられて芸者街に行きました。店に小さな女の子がいて、一緒に遊んでいました。また、たまに馬に乗せられて幼稚園に通ってました。あと、青島には競馬場がありました。となりにドイツ人が作ったビール工場がありました。その工場は日本がドイツから受け継いで、日本人が経営していました。競馬場では、父がとなりの工場から豆とビールを買ってきて、それを飲まされて、最後まで観ていました。

—— 競馬場は日本人が作ったのですか。

小崎 いえ、ドイツ人でしょう。

—— 中国には競馬文化があるのですか。

小崎 ありません。

—— 私は青島には行ったことがありません。きれいな街だと聞きますが。

小崎 きれいな街です。緑が多くて、屋根は赤くて。ドイツ人が作った街ですから。中国の海は通常、泥で黄色いのですが、青島に限っては真っ青の海でした。

—— 気候は温暖ですか。

小崎 そうです。

—— 避暑地というか、遊びに行くところですか。

小崎 中国の要人の別荘がたくさんあります。夏と冬には要人が休みに来ます。私はその後、2、3回青島に行きましたが、写真をたくさん撮りました。中国人の新婚さんが海岸でよく写真を撮っていました。

—— 日本でいうと熱海か湘南といったところでしょうか。

小崎 そんな感じです。非常にいいところでした。日本人はドイツ人のあとを引き継いで経営したけれども、いい面も悪い面もありました。当時は第一小学校と第二小学校があり、それから中学校と女学校がありました。三船敏郎は青島の中学の出身です。

—— ドイツ人は残っていたのですか。

小崎 多少は残っていました。

—— 他の国の人はいたのですか。

小崎 いません。上海には世界中から人が来ていました。青島は日本人に限られていました。

—— では日本人と中国人が雑居していたのですね。

小崎 そうです。

—— 山東といえば、あの頃は山東出兵がありましたか、ご記憶はありますか。

小崎 あります。ちょうど蔣介石が山東出兵にあたり、南の広東から出てきて、青島・済南で日本軍とぶつかります。日本軍も在留民保護のために出兵して、青島に上陸しました。陸軍が海軍の船に乗って上陸してしまし

た。それが済南で北上する北伐軍と衝突しました。私たちは直接は遭遇しませんが、北伐軍は目にしました。彼ら国民党軍はおおきな長刀をもっていました。小さい子供が戦闘にまぎれて帰ってこなくて、家の人が探しにいったこともありました。

—— 実際に避難はされたのですか。

小崎 避難はしていません。

—— 青島と済南は離れているのですか。

小崎 離れています。

—— 陸軍は青島から上陸したのですか。

小崎 そうです。

—— 当時の中国の北伐を実際に体験されたわけですね。

小崎 子供の目ながら日本軍は立派でした。服装はきちんとしているし、武器もしっかりしたものを持っていました。中国の兵隊はそうではなく、鍋釜下げて、兵器もいろいろでした。

■再び大陸へ—東亜同文書院大学入学

—— 小学校1年の時に日本に帰ってこられるのですか。

小崎 父は青島に残りまして、私と母は滋賀県に帰りました。そして滋賀県の中学校に入りました。

—— 滋賀県の何というところですか。

小崎 水口です。水口中学に通いました。

—— 水口中学のあとのコースをお聞かせください。

小崎 旧制水口中学に5年間行きました。その後、中国大陸の学校に行きたかったのです。上海の東亜同文書院を受験しまして、上海に行く事になりました。ただ、その間1年浪人しました。その間、京都の親戚の家でお世話になりました。勉強しないで遊んでばかりいたから、田舎に帰った方がいいかと思い、帰りました。帰ってから、受験雑誌に応募して、作文が入選したこともありました。その後、東京の高千穂高商で試験を受けました。受験者数がものすごく多くいました。同文書院は、県費生がいて、彼

らは各県で受験しました。それまでは滋賀県に県費生がいたのに、私が受ける年だけありませんでした。おかしいと思って学生監に文句を言ったら、次の年から出すことになりましたが、私はもらえませんでした。

—— 中国語はその時点でお出来になったのですか。

小崎 いいえ。上海に行ってからです。青島ではかたことです。多少耳に残っているくらいでした。

—— 大陸の大学に行きたいという人は多かったのですね。

小崎 受験者はとにかく多かったです。大講堂に一杯、千数百人いました。それは私費生でして、県費生は別に試験がありました。これはだめだと思いました。わからない問題もありました。でも何とか合格しました。

—— 受験科目は他の大学と変わらないのですか。

小崎 そうですね。

—— どんな科目があったのですか。

小崎 外国語がありました。これは英語でして、中国語ではありません。あとは国語、算数、地理歴史もありました。よく合格できたと思いました。

—— 中国でお生まれになったのが書院を目指された理由ですか。

小崎 そうです。同文書院に行って初めてわかったのは、1学年170名くらいで、そのうち大部分は県費生でした。満鉄の派遣生もいました。満鉄内部では厳しい競争があったようです。毎日新聞からも来ていました。また、九州の学生の数が多かったです。博多や福岡、鹿児島などです。本州の方は人数が少なく、北の方になるともっと少なかったです。

—— 当時は支那事変の頃ですね。戦争している場所に行かれるにあたって心配はなかったのですか。

小崎 学生の身分ですから、それほど心配はしていませんでした。

—— 中国ブームというか、これからは中国の時代であるといった認識があったのでしょうか。

小崎 そうですね。

—— 同文書院が大学になったのは1939年ですか。

小崎 そうです。同文書院は1890年に日清貿易研究所ができて、そ

れが3年制の学校でして、商業系を教えていました。最初は荒尾先生〔荒尾精〕が苦勞して全国を遊説して回りました。初めは学生も不揃いでして、優秀な学生もいましたが、でこぼこでした。それで1900年に南京同文書院を作りました。そこに義和団事件が起って、危ないということで上海に東亜同文書院を作りました。大学は予科が2年で学部3年の合計5年でした。ところが戦争中でしたから、学生をやめて兵隊に行けという雰囲気もありましたが制度としては残っていました。結局、昭和18年12月に兵隊に行けということで行きました。

—— 真珠湾攻撃の報せは上海で聞かれたのですか。

小崎 そうです。

—— 同文書院は今の交通大学の場所にあったのですね。

小崎 そうです。

—— 当時の上海はどんな所でしたか。

小崎 本当にいいところでした。日本では及びもつかないくらいです。

—— 日本からは長崎から行くのですか。

小崎 そうです。神戸からも行きましたが。長崎からは一泊で行けました。

—— 定期便があったのですか。

小崎 そうです。「長崎県上海市」と言っていました。我々は170名前後で行きました。予科を終わって学部に入る時に、日本の内地にいる学生から希望を募って受けさせました。高商から10名くらい入りまして、合計で180名くらいになりました。それにしても、上海はいろいろな人がいて面白かった。

—— 全員が寮に住んでいたのですか。

小崎 そうです。本当に楽しかった。お金が無くて困ったけど、毎週土曜日のお昼にお小遣いがもらえました。満鉄から来ている学生は裕福だったけど、我々は全然駄目だった。

—— 当時は銀が流通していたようですが。

小崎 そうです。ただ相場は上がったり下がったりしました。銀貨一枚をもらって電車やバスに乗ったり、飲みに行くくらいのはできました。

滋賀県の出身で同文書院の先輩が上海に住んでいました。そこへ滋賀県出身者がみんなで行きまして、ごちそうしてもらいました。非常に楽しい時でした。各県で似たようなことをやっていました。また同文書院の滋賀県出身の馬場先生という方がおられまして、大旅行の指導者でした。経済学や街の様子を詳しく教えてくださいました。私が入った翌年は滋賀県から2名、翌々年は3名が県費生として入ってきました。

—— 電車やバスは戦時下でも大丈夫だったのですか。

小崎 はい。電車は一車両でした。一等車と三等車に分かれていました。

—— 外国人との付き合いはあったのですか。

小崎 ありました。私が入学する前は交通大学とスポーツで交流していました。あと同文書院は運動部がすごく多かったです。私は庭球部とボート部に入っていました。川には、自沈したイタリアのコンテベルテ号という船が半分浮いていまして、そのまわりを漕いでいました。それから乗馬部にも入っていました。3つやっていました。柔剣道は同文書院は強かったです。西日本の大会で優勝していました。

—— 日本の大会に同文書院が参加するのですか。

小崎 そうです。あとはサッカー、野球もありました。

—— 書院には左翼も右翼もいたのですか。満鉄もそうですしね。

小崎 そうですね。

—— 学生で活動している人もいたのですか。当時の上海は共産党の活動も活発だったと思いますが。

小崎 いました。そういう時代でした。退学になった者もいました。

—— 結局大旅行には行かれたのですか。

小崎 一人で行きました。

—— 大学としての大旅行はなかったのですか。

小崎 なかったです。私たちがずっと学校にいれば大旅行に行けたのでしようけど。戦争に行きましたからね。

—— 大使が行かれる前の年まではあったのですか。いつ頃からなくなったのですか。

小崎 支那事変の頃からです。私的大旅行については、林出賢次郎さんという大先輩で、入学時に東京から上海まで連れて行ってくれた方ですが、その方に対して、みんなと行くといってもいつ行けるかわからないし、どうせ行けないかもしれないから一人で行くから許可してほしいと言いました。すると、「では気をつけて行ってこい」ということで許可をもらいました。お守りと許可証をもらいました。そのころ、ちょうど私の2年先輩の学生〔第40期生〕が上海から青島に船で行きまして、私も同じ船に乗りました。

—— 一番遠くではどこまで行かれたのですか。

小崎 包頭です。それから蒙古で奥地へ行く予定でしたが、大雨が降ってきました、トラックの荷物の上に乗せてもらって行こうと思っていたのですが、さすがにやめました。奥地には書院のとてもいい先輩がいたのですが、張家口からさらに奥まで行くつもりだったのですが、雨で危ないからやめました。

—— その翌年には陸軍の第61師団に入られるのですね。

小崎 そうです。

—— 陸軍の経理学校が南京にあったのですか。

小崎 そうです。

—— 大使には大陸に雄飛するというお気持ちもあったのでしょうか。

小崎 ありました。

—— そろそろお時間になりました。次回以降も我々の知らないことがたくさん話題に上るかと思えます。今後もそのあたりを思い出していただきながら、お話しをお聞かせいただきたいと思います。ありがとうございました。

第2回

・日時：2014年11月7日 15:00～18:00

・場所：愛知大学東京霞が関オフィス

・インタビュアー

武田知己（大東文化大学法学部教授）

金子貴純（大東文化大学大学院法学研究科博士課程前期課程1年）

——最初に前回の補足をさせてください。青島のお話しです。山東出兵は3回ありましたが…

小崎 青島は三国干渉後、ドイツが支配しました。それを日英同盟があったので、イギリスに頼まれて、青島を日本が攻略しました。それからドイツが持っていた南洋諸島も取りました。統治権はないけれど支配権はあった。青島は子ども心に思い出すときれいでいい街でした。海岸や山の上などにドイツの砲台があり、よく遊びに行きました。戦後、青島に行ったのですが、当時のものがどこにあるかわからない。再開されたのでしょうか。あと青島は軍港ですから、よく見せてくれない。海岸のとつぎのところに、亀の甲みたいな大砲が築造してあって、どちらにも撃てるようになっているのです。その亀の上に乗って遊べる。子供のとき、よく行って遊びました。今、行けるかどうかわかりませんが。

——砲台があったということは軍人もいたのでしょうか。

小崎 いました。済南事件のとき、この年は世界恐慌でしたが、1928年4月に支那派遣軍から第3師団が、済南が危ないということで派遣されてきました。私は子供でしたから、あまり正確ではないのですが、当時、私は港の近くに住んでいました。日本人は青島全域に住んでいました。小さい街ですからね。おそらくドイツ人がいたところに住み込んだのではないのでしょうか。料理屋がならんでいる通りもありました。ですから、青島全体に日本人が住んでいたように思います。

それから私は、小学校に一学年行ったのですが、第一小学校と第二小学校がありました。中学と女学校もありました。中学は、その頃には名の売れた中学でしてね、同文書院にもそこの出身者がいました。有名なのは、三船敏郎。中国人との付き合いは子供だったからなかった。そして小学2年になってから帰ってきた〔1929年〕。

——済南事件、第2次山東出兵を覚えていらっしゃるわけですね。

小崎 そうですね。

—— その後滋賀の水口中学に行かれるわけですが留年などはされていないのですね。

小崎 そうです。水口中学に入学したのは1935年。あと大旅行に行ったのは1942年6月です。期間は1ヶ月半。6月末に出て、船で上海から青島に行って、青島に2、3日滞在して、済南、石家荘、太原、太原の南方に行きました。8月末くらいまでです。

—— 大東亜戦争の最中ですね。

小崎 そうです。同文書院に入ったのが昭和16年。15年に中学を卒業しましたが、1年浪人しました。同文書院は全寮制で先生も学内に住んでいました。朝、起こされて整列して学長から訓示がありました。「米英を敵にして戦うことになった。お前たちの先生は通訳としてもう出ていった」という話しでした。当時上海には共同租界、フランス租界があり、大租界だったので、私が勘定したところによると、世界中から50くらいの民族が集まっていました。戦争が始まったので、「ここは日本軍占領地域である」などということを外国人に説明して回らないといけない。もちろん租界は占領できませんが。そういった仕事に英語の先生はみんな動員されていました。

■学徒動員

小崎 昭和17年までは日本軍が攻勢な時代でした。羽を伸ばしていたら、昭和18年になっておかしくなってきた。そして兵隊に行かなければならなくなって、昭和18年11月に学徒動員の徴兵検査がありまして、その後動員されました。昭和18年の12月に南京の61師団に入りました。上海から南京まで列車で行きました。その間にもいろいろありました。日本で学徒動員の分列式があったでしょう。あれと同じことを上海の日本の神社の境内でやりました。書院の学生ばかりです。当時は予科が2学年、学部が3学年でしたが、予科が1年半に短縮されて、学部の方もだんだんと短縮されました。短縮するけれども、兵隊に行かなければならなくなった。

あと、書院の話しをすると、運動部と文化部があってどれかには入らなければならなかった。私はテニス部に入って、後で乗馬部とボート部に入りました。あと上級生が大旅行に出かけるときは、皆講堂に集まって余興を、大旅行送別会をやるのです。送別の歌もありました。「嵐吹け吹け」という歌です。バンカラでした。バンカラでしたが、入学にあたり上海に来た時に船から降りると、書院の学生がきちんとした服装で出迎えていました。彼等は、「ここは世界に冠たる大租界がある。世界の人から馬鹿にされないように服装はちゃんとしていないといかん」と言っていました。これは以前からの伝統でした。我々はこのことを東京に居るときから聞いていました。実際、船が岸壁に近づくと、書院の学生が旗を振って出迎えていた。寮歌や院歌を歌っていた。我々も東京から上海まで行く間、蓄音器でレコードをかけて寮歌や院歌を教えられていました。三浦環というプロが歌ったものがレコードには吹き込まれていました。それで、上海に着いたときに、岸を隔ててお互い怒鳴り合うように歌った。船を降りた後、共同租界、フランス租界を通過して同文書院に入りました。赤い門が入口にあって、中に入ると驚きました。青々とした芝生が「もえている」のです。そこに上級生が全員立ち並んで我々を待っていました。

—— 上海では青春を満喫できたのですね。戦時中だからもっとひどい状況かと思っていましたが…。

小崎 上海は平穏でした。空爆はあとから来ますが。

—— 書院の学生は61師団と決まっていたのですか。

小崎 いえ。バラバラでした。

—— 昭和18年11月に徴兵検査を受けられた。

小崎 そうです。その12月に日本に一旦帰ってきました。上海丸ともう一隻の船で全員帰ったのですが、途中で上海丸が沈んだのです。日本軍の輸送船と衝突して。私は上海丸でないもう一方の船に乗っていましたが、ものすごい音がして、これは潜水艦にやられたと思って、みんな飛び起きて救命具を付けて甲板に上った。そうしたら、真っ暗な海で何も見えなかったけど、何かとぶつかったということでした。まだ中国に近いところで

ぶつかったのでしょうか。日本軍の和浦丸という船が、南方に資材と、あと人員も運んでいたのでしょうか、それが上海丸とぶつかって船は沈んでしまった。上海丸に乗っていた書院生は、海に飛び込んだのもいましたが、沈む前にぶつかったその輸送船に乗り救われました。輸送船は南方に資材を運んでいたため、彼らは台湾の高雄まで連れて行かれました。そして高雄から松浦丸に乗りかえて、日本に帰ってきた。日本の家に帰れた者もいましたが、時間がなくなって帰れなくなってそのまま上海に戻った者もいると思います。私、初めは上海丸の方に決めていたのです。上海丸は長崎で降ろす、神戸丸は神戸で降ろすことになっていた。近い長崎の方が潜水艦にやられないと思って。決めていたんだけど、もたもたしている間に切符が売り切れてしまって、神戸に行く船に乗ったのです。幸い私は、郷里に帰って、上海に戻りました。

そして12月31日に南京の61師団に入りました。1日前に上海を列車で出発しました。その前に上海ではいろいろなことがあって、学徒動員の分列行進なんかをやらされるのだけど、その日に「六三亭」という料理屋が燃やされるんですね。なぜかという、行進をみた日本人が感激してね。こんな時に六三亭で飲んでる奴があるか、と言って燃やしちゃったらしいです。南京では学生服も脱がされて、全部日本に送り返せ、と。送り返すといっても、紙もひももないから、街で探していたら、日本の布団屋がありました。それで、「我々は学生だけれども、荷物を送りたいから、紙とひもがあったらもらいたい」と言ったら、喜んでくれました。親切な人でした。布団屋ですから、大きな紙があるのです。それに包んで送ったが、これは日本には着かなかった。途中でとられたみたい。戦後その人は四国の観音寺にいました。そこを訪ねて「ありがとうございました」と言ったら、「よく生きて帰ったね」と喜んで感激してくれました。奥さんと妹さんだけだったですけど。旦那さんは兵隊にとられていました。

そして61師団に入って、上海から夜の列車で連れて行かれるのは、戦時中のことですから、東西南北どこへ行くのか知らされない。北の方に連れて行かれた。それで降ろされたが、どこに降ろされたかもわからない。

それで軍隊に入るといので、軍服着て、新しい靴をはいたんだが、その靴がぶかぶかでまめができたりする。軍隊の寮に入ると、中に5～60人入る部屋がありました。そこに兵長がいて、「おれは陸軍士官学校出た」といばっていた。陸士出たのがこんな兵長やるのかなと思いましたが。後で聞いた話ですが、陸士で当番をやらされていたらしいです。4、5日してから合肥で毎日鍛えられた。私たちは散々中学時代から軍事訓練をやってきたから知っていた。だから同じことをやらなくてもいいんだけど、やらせるんだ。そこが昔の日本軍。どうなっているんだろうと。だから負けたんだろうと思いますが。そして翌日から合肥の郊外の練兵場へ毎日演習に行きました。毎朝駆け足で行きます。冬の寒い時は汗が凍っていました。そういうつらい中で演習をしました。そして4月に、經理学校の試験を受けて、5月ごろに南京に行きました。

—— 經理学校は外地にもあったのですね。

小崎 我々が一期生です。三期生が入ったところで終戦でした。5月から7月くらいまで師団司令部に行って事前訓練を受けていました。演習もしながら。そして8月頃に經理学校に入りました。一期生訓練が終わる頃、「お前はここに残って二期生を教育しろ」と言われて残されました。南京經理学校には10個区隊ありました。我々が入ったときには8個区隊しかなかった。二期生は10個区隊。二期生のところに、新しい区隊長がきました。

二期生の教育が終わると、原隊に帰れと言われて帰りました。原隊は上海に残ってしまして、師団司令部付主計将校になりました。昭和20年です。その他にウースンに地下壕を作って、監督もしていました。当時上海には2個師団がいて、8月8日にソ連が参戦して日本を攻撃しました。我々がウースンで仕事をしていると「今日ソ連が参戦した」と聞かされた。どちらかの師団が北上して満州に行かなければならないと。だから帰れと言われて、ぼろ車で帰っていたのですが、ウースンから師団司令部の途中の、道の真ん中で車が止まっちゃった。動かないのです。真っ暗になって、やっと直ってその後師団に戻ると、となりの部隊が行く事になり、準備していました。代わりに、となりの保東地区を警備しろということで、翌日警

備していました。その地区には大きな捕虜収容所がありました。

■終戦、対日文化工作委員会との関わり

小崎　そして8月13日は中支那地区の各隊が集まる師団司令部の合同会議が上海でありまして、私は61師団を代表して行きました。そこで、「これは言うてはいけないが、外国の放送によると日本は負けた。これから3ヶ月は自活していかなければならない。3カ月自活するだけの金を渡すから頑張れ」と言われました。その場で現金をくれるのかと思っていたら、「横浜正金銀行の地下倉庫に入っているからもらってこい」と。それで師団司令部に帰って、トラックで取りに行ったら山盛りですよ。一箱2億8千万ドルくらい入った箱が山のように積んであった。

—— それはどこのお金ですか。中国紙幣…

小崎　中国紙幣だったし、法幣もあった。あんなお金その後見たことない。トラック一杯に入れて持って帰っても、師団司令部には置く場所がない。そこで庭にテントを張って。歩哨をつけてね。「それぞれ車をもって取りに来い」と言ったらみんな取りに来ました。みんなに渡して、あとは食糧と衣類も師団司令部の倉庫にありますから、それも渡しました。その時はいちばん忙しかった。

現地入隊した者は現地で除隊できるというので、上海で除隊しました。そして内山書店の裏側の「千愛里」に日綿の支店長のうちがあって、泊めてもらうことにしました。その後同文書院に行きました。復学できると思っていた。すると、学長も学生も全員、上海の青年会館に疎開していて、日本に帰るのを待っているということで、誰もいませんでした。仕方ないから、上海に残ろうと思った。というのは、終戦後、重慶軍が上海に入ってきたのです。重慶軍は上海事変で負けて、一步一步後退して、南京でも負け、漢口でも負け、奥地に引っ込んで3年くらいそこにいました。そして、重慶軍は腹が減っているものだから、日本軍のものは何でもとるんです。私も街を歩いているときに時計をとられました。

—— 命の危険は感じましたか。

小崎 命の危険は感じませんでした。そこは蔣介石が偉かった。ソ連軍と全然違った。満州にいた人は大変苦勞したでしょう。ずいぶん亡くなったし捕虜にもなりました。我々の同文書院の会長の近衛文麿公の長男、文隆氏も殺されました。その点は上海にいて非常に助かりました。そのうちに重慶から来た連中が対日文化工作委員というものを作りました。それは何かというと、新しい対日関係を作るセクションだということでした。

—— そういった情報はどこから入ってくるのですか。

小崎 現地に残ろうとしていた日本人と連絡すると、重慶軍と連絡をとって、戦後の対日関係について情報をとってこいと。そこで私が行って、対日文化工作委員会の羅兄弟と話しをしました。すると、「お前たちの家を探してやる」ということで、ガーデンプリッジから北へ上がったところ、ウースン路だったか、三階建ての日本人の呉服屋がありまして、そこに入れと。同文書院の学生で残っていた二人とそこに入りました。戦後、日本人は「日僑」という腕章をつけて、閉じ込められていました。我々はそれがおもしろくないから、夕方になるとそれを取って、遊びにいきました。

当時、ウースン路の表門は夜になると閉じられまして、裏の格子戸、鉄門を飛び越えてとなりのフランス租界や共同租界に行きました。一回捕まったことがある。工部局の警察に捕まった。工部局というのは、フランス租界と共同租界を統括する行政機関でして、警察をもっていて、夜になると歩いて街を警戒していました。はじめはうまくごまかしたが、2回目は捕まって、「お前は日本人だろう」と聞かれた。中国語が下手だから。それで工部局の地下にぶちこまれた。我々三人のうち、一人は宿舎に残っていて、二人が捕まった。工部局の上の連中が明け方になって庭に連れ出して、「お前、金持ってるか」と言うから「多少はある」と答えた。それを渡したら勘弁してくれました。我々がぶちこまれた後にも続々入ってくるんです。それは皆朝鮮人でした。彼らは「明日朝鮮に向かう船が出るのに、乗れなかったら大変なことになる」と言って大声で騒いでいました。すると、工部局も仕方ないから出していました。我々もそれにならって、大声をあげて出してくれと言っていたら、外へ連れ出して、「お前金あるか」と。

—— 中国に残らざるを得なかった、というか残りたかったのですか。

■帰国

小崎 残りたかったです。当時中国人は長く戦争をやって、みんなお腹が空いているものだから金目のものは手をだしてポケットに入れてしまう。それで我々との間に喧嘩になってきた。中には仲のいい連中もいましたが。そしてもういい加減日本に帰ろうじゃないかと、船がいつ出るかも分かってきたし、この際日本に帰って一旦出直おそうと。「千愛里」に帰ってきました。そして「千愛里」には日本人がいっぱいいました。我々は皆若いから、班長をやれと言われて、班長として荷物の運送や人員の編成、統括をやって船に乗せて、帰ってきました。

そして帰ってきて、京都に対日文化工作委員会京都事務所という看板を掲げたのです。というのは、京都から出た同文書院の事務員がいて、上海に終戦の時もいました。そして青年会館で逢いましたら、「日本に帰ってもやることないなら、家に来い。一緒にやろう」と言われました。何をやるかは分からなかったけれど、訪ねていきますと言っておいた。そして、京都の五条坂に事務所を借りていて、筆で書いた看板が掲げてあったが、中国からの連絡はなかった。それで我々も自活しないといけないから、闇商売でもやろうと。九州に雑魚を買いに行ったりしました。

いろいろやっていたけれども罅が明かないので、もう一回学校に行きたいと思っていました。日本には21年5月に帰ってきたのですが、日本の学校は、いついつまでに申請がないと入れないと決めていたのでしょう。それで私、京都にいましたから京大に行きましたら、10月くらいに試験をやる。そうしたら、豊橋から小岩井浄さんから電報がきまして、「豊橋に大学を作ることになって、許可が下りたから出てこい」と連絡がありました。

—— それは日本に戻った書院の学生みんなに出したのでしょうか。

小崎 みんなに出しました。小岩井さんには上海で世話になりました。先ほどの「千愛里」にいた時ですが、在留邦人には情報が何も入ってこない。

船がいつでるとか、日本はどうなるとか。全然わからない。そこで小岩井さんは、「我々は将来どう生きていったらいいか」ということについてゼミナールをやってくれました。内山書店の裏の「千愛里」で。さすがの小岩井さんも日本に関する情報は何も知らなかったけれども。そこに女性がいたのです。小岩井さんに必ずついていた。そのゼミは、同文書院の学生と隣近所にいる希望者を皆入れていたのですが、そこに知らない日本人女性が来て聞いていた。その方が豊橋に行ったら奥さんになっていました。山岸多嘉子さん、五・一五事件の首謀者、山岸中尉〔山岸宏〕のお姉さんです。中国では社会活動をやっていたらしいのですが、豊橋について来ていたのですね。

—— 小岩井ゼミは何人くらいでしたか。

小崎 覚えていないけれど、少人数でした。20～30人でしょうか。

—— 内容はどのようなものでしたか。

小崎 精神論です。情報はなかったから。戦後いかに生きていくべきかということ。もし大学を作るのならどういう大学にすべきか。日本はどう再建すべきかなど、精神論的なものでした。

—— 何か覚えてらっしゃいますか。

小崎 内容は覚えていません。

—— 小岩井さんはその頃はすでにかなりリベラルな方だったでしょう。

小崎 ええ。大阪で弁護士活動をやっていて投獄されました。共産黨員だった。その後転向しまして、上海では同文書院の学長と知り合いになって。学長は矢田〔七太郎〕さん、本間〔喜一〕さんが予科長でした。

—— 先生の中にはリベラルな方もいらっしゃったのですか。

小崎 いました。右翼もいたし左翼もいました。学生もそうです。私の同期で、予科寮に入った時、東寮と言うのですが、そこに私と藤原という神戸出身の者と、神谷〔信之助氏〕という京都出身の者がいまして、もう一人南里という上級生で九州出身の者の計4人がいました。藤原君は今も神戸で弁護士をやっています。神谷君は亡くなりました。学生の時は右翼だったのですが、日本に帰ってきて、新聞社に入ったのかな、左翼で共産党

員になりました。私が日本に帰ってきたころには、共産党の参議院議員になっていました。2期やって、病気で亡くなりました。彼とはよく会いました。京都にいましたから。右も左もいて本当に面白い学校だった。

—— マルクスを読まれましたか。

小崎 ちょっと読みましたよ。

—— 中国にいらっしゃったときに共産党には入られましたか。

小崎 入っていません。

—— 大使が中国におられたのは国共内戦が始まる前でしょうか。

小崎 始まる前です。国民党には知り合いがいました。先ほどの対日文化工作委員会の連中とは付き合いがあった。でも共産党はいなかった。その後外務省に入った後に最初に勤務したのが台湾でした。当時は台湾としか付き合いなかった。台湾に行ったら蒋介石と一緒に来ている国民党員がいた。もともと国民党とはつうつうの仲ですからね、戦争をしたとはいえ。共産党のようにえげつないところはないと思っていましたから付き合いしました。

—— 戦争中はどうでしたか。

小崎 戦争中は会ったりなんかはできない。戦後は台湾の張群、何応欽などのお偉方と付き合いしました。何応欽は上海方面軍司令官、台湾では戦略顧問、中日文化経済界会長をやっています、一緒にゴルフをしましたよ。あとは湯恩伯將軍。

—— 南京や中支那には共産地区はなかったのですか。

小崎 所々ありました。

—— 戦後、中共に留用された日本人がいましたが、共産党が日本人にアプローチしてくるのは46年より後なのでしょうか。それとも満州など北の方で共産党の手助けをしていたのですか。つまり大使は国民党と一緒にやろうとした。ですが歴史的にわりと知られているのは、中華人民共和国、中国共産党の側が、大陸に残った日本人を使って、満鉄を運営したり線路を敷いたりといったことが知られていますが、なぜ大使がおられた上海では中国共産党からのアプローチがなかったのかな、と思ひまして。

小崎 ないです。

—— 地域の問題でしょうか、それとも時期の問題でしょうか。

小崎 地域によっては日本軍ががんばっている地域があるのです。上海地域など。3カ月は自活しろと引導を渡されているのです、東京から。それで重慶軍と連絡をとって、重慶軍とは話しが通じたわけです。重慶軍は3カ月より長くいつまでもいてもらっていいと言った。お金も弾薬も持っていていい、と。いっぺん〔重慶軍に〕渡した武器もあったけれども、取り戻すことができる地域もあちこちに残っていた。だから中共が攻めてきて占領するまでは、国民党のものになるわけです。蒋介石は初めはずっと北の方へ上がっていったけど、満州で戦争に敗れて逐次南下してきたでしょう。その間だんだん地区を失って、上海から台湾に逃げたわけです。ですから、いっぺんに中共に占領されたわけではないのです。

—— そういった中国の情勢は、大使は分かっておられたのですか。そういう情報は入ってきたのでしょうか。国民党が負けそうだとか。

小崎 それは中国にいるときからわかっていました。でも最後までは知らなかった。外務省に入った後台湾に行ったら、蒋介石軍が大陸反攻をスローガンに掲げて、日本人の元将官を参謀に、白軍に使っていました。

—— 戦争中は中国共産党は敵ですよ。

小崎 そうです。

—— 大陸にいると中国共産党が拠点を増やして勢力を増しつつある、ということは戦争中にわかるものなのではないでしょうか。

小崎 いえ、わかりません。情報部や参謀本部など情報機関にいればわかるかもしれないけど、一般にはわからない。

■同文書院への尽きない想い

—— 書院出身の外交官は石射猪太郎さんをはじめたくさんおられました。おそらく、昔でいう専門官、今でいうノンキャリアの専門職の方が総領事館などにおられたと思いますが、そういった方の情報は入ってくるのでしょうか。戦時中、戦後に。

小崎 書院のネットワークはしっかりしていたけれども、戦後はわからなくなりました。

—— 書院の関係者の方はたくさんいたのでは。

小崎 五千人くらいいた。

—— それだけいけば、上海などに情報を知らせてくれてもよかったように思えるのですが。

小崎 終戦の時はそれどころではなかったです。それぞれ己一人のことで精いっぱい、全体を見回して指図するようなことはなかったでしょう。私は終戦の年に上海で同窓会があって、出ると東亜局長や上海総領事をやっていた堀内干城氏がいて、堀内氏を中心に話しがあった。でも堀内氏も日本からの通信が途絶えているからわからない。戦後日本に帰ってからの話しはありましたが、全体を見渡してどうこうするといった話にはできないです。同文書院を出た人はいろいろなところにいましたから、そういう人たちを訪ねればいろいろなことがわかったのでしょうけど。例えば石射猪太郎氏とか。

—— 石射猪太郎氏とはお会いしたことがあるのですか。

小崎 ないです。息子さんとは電話で話をしましたが。もう亡くなっていましたから。あとは若杉要氏。会ったことはないですが。あとは山本熊一さん。山本さんには何回も会いました。アメリカ局長、東亜局長や外務次官をやった。

—— あと林出賢次郎さんも外交官ですね。

小崎 そうです。

—— 林出さんのお話しは後日、日を改めましてお聴きしたいと思います。我々日本外交史をやっていると、しょっちゅう名前が出てきます。重光葵は、上海事変の時、上海の総領事館で林出さんと一緒にやっていたし、あと重光の弟さん（重光蔵）が同文書院でした。何を教えていたのでしょうか。

小崎 国際法です。

—— 書院時代の、生活の様子というか、何を食べてどういった授業を受

けていたのかといった学生生活の実態をお聴きかせいただけますか。

小崎 それは非常におもしろい話になりますね。全寮制ですから、学生以下教授、構内には看護婦が一人いた病院もありましたが、女の人はずいがないと思っていいです。男性ばかりで全員寮に入っていて、料理や風呂焚きなどは全部中国人がやる。彼らは割りと親日的なんです。そうでないと我々は暮らせませんから。「おっさん」と我々は呼んでいました。食事は朝昼晩と食堂で出してくれる。白米を炊いて、御櫃にいれて。中華と日本風とがごちゃまぜでしたよ。料理はお皿に7つか8つ出てくる。魚もあり肉もあり。朝は必ず味噌汁。日本人が昔から教えているんです。そういうのがないと学生がやかましいから。

下級生は机の端にいて上級生のめしつぎをしていました。朝は味噌汁、漬物、焼き魚。昼は中華風の料理も出てくる。量は多かったですよ。ただ戦争でだんだん追い詰められてきたら白米に麦が多くなってきたし、かぼちゃをずいぶん食べさせられた。かぼちゃは体にいいんです、我々はそんなことは知らないものだからぶつぶつ言っていましたけど。それ以外に、天皇誕生日などお祝いの日にはごちそうがでる。添菜がつくのです。食事は時間になると鐘が鳴るんです。腹が減っているのはその前から並んでいた。運動部は遅いところは、飯が無くなる頃に戻ってくるのもある。野球部やラグビー部やサッカー部などは遅くまで練習してるから、戻ってきて「飯がないぞ」と騒いでいた。あと菓子屋もありました。

それから授業は、大講堂のとなりが二階建ての校舎でして、それぞれ50名くらいの教室でした。そして時間割が配られまして、いろいろな学科がありました。怖い先生もやさしい先生もいましたが、みんないい方でした。家にも遊びに来い、と言ってくれました。ウイスキーなんかもこっそり飲ませてくれた。本当は校舎の中ではお酒はのんではいけなかったけれども。

—— 教員も敷地内に住んでいたのですか。

小崎 そうです。もう全員入っていました。それで門を出るときには、そこに生徒全員の名札が掛けてありまして。外出するときには、名札を裏に

しておくのだったと思います。校門にいるおじさんに普段からおべっか使っておかないと、時間に遅れた時にいれてもらえなくなってしまう。あと質屋もありました。とにかく何でも売っていました。部活動は運動部と文化部に分かれていて、文化部は音楽部や座禅を組むようなクラブがありました。放送局に演奏に行ったりしていました。

—— 愛知大学に入られるのは昭和 22 年ですね。先ほど言われていたように京大に入るおもつりもあったのですか。

小崎 ええ。でもやめました。

—— 東亜同文書院という名前はなくなってしまうのですが、それは最初からそうだったのですか。

小崎 始めは作ろうとしたけれども、GHQ ににらまれまして。何回も学長が呼び出されたのです。結局、同文書院とは何の関係もないとうそをついて、愛知大学を作ったものだから、あとになってからいろいろ文句を言われた。でも今となっては全然そういったことはなくなりました。そもそも同文書院出身者で生きている者もあまりいませんから。

それから 1 年の終わりに小旅行に南京と蘇州に行きました。行きは船で行きました。天候のよいころで梅が咲いていて、百花繚乱というか、いい風に吹かれて揚子江を上って行きました。南京でいろいろなところを見て、蘇州に市川さん〔市川修三〕という同文書院の先輩が領事にいて、紹興酒のつぼが官邸の壁に並べてある。そこで料理やお酒をごちそうになった際、小島という中国語のものすごくうまい者が北京から来ていまして、中国のお芝居をやるんですが、それが実にうまい。忘れられない思い出です。それから運動会が実におもしろかった。衣装は借りてきました。

—— 当時の上海の様子はどうでしたか。

小崎 フランス租界はすぐ隣でした。フランス租界にはロシア人がいました。革命の時に亡命して来たのです。そこで料理を出したりコーヒーを飲ませたりしていました。インド人など、世界中から人間が来ていましたよ。あと南京楼には何でもあるから買い物に行きました。デパートもある、映画館もある。それから共同租界はフランス租界と変わりない。自由に歩け

ます。ガーデンプリッジだけは歩哨が立っていた。戦前は工部局の歩哨が立っていましたが、戦時中は日本軍の歩哨が立っていました。共同租界はどちらかと言えば中国風の感じがしました。

—— もう3時間になりますので、次回外務省に入られる所を詳しくお聞きしたいと思います。それから台湾についてもお聞きできればと思います。ありがとうございました。

第3回

日時：2014年12月12日 14:00～16:00

場所：愛知大学東京霞が関オフィス

インタビュアー

武田知己（大東文化大学法学部教授）

金子貴純（大東文化大学大学院法学研究科博士課程前期課程1年）

■外務省入省

—— 今日外務省に入省された後のお話から、できれば台湾時代のお話しまでお聞かせいただきたいと思っております。事前に質問事項を送付させていただきましたが、大使の方でお話ししたいことがございましたら話をはさんでいただければと思います。よろしくお願ひします。それでは、まず外務省に入省されたきっかけというものはございましたか。

小崎 同文書院からは、私が入省を考える以前に先輩たちがずっと外務省に入っていました。

—— 一番最初はどなただったのですか。

小崎 若杉要氏。第三期生です。それから五期生が石射猪太郎氏。毎年そういった方々が幹部として外交官試験で入っているのです。それ以外の一般の試験で入っているのも毎年5、6人はいました。私たちは、同文書院に行った時からそういった先輩からいろいろな話を聴いていまして、書院に来た人間はみんな外務省に入れということで。大部分は御承知のとおり商社に入っていました。外務省にも一年に5、6人は行っていました。

そういうことで私も外務省に入りたいなど。元々外国で、青島で生まれま
したから、外務省関係で仕事をしたいという気持ちは同文書院に入った当
初から持っていました。ところが戦時中ですから、軍隊に徴用されて、同
文書院は中途半端に終わりました。それでもう一回勉強し直そうと愛知大
学に入って勉強したから、外務省に入ったのは遅かったのです。私と同期
は、年齢はずいぶん違います。私は一番年寄りな方でして。軍隊に入っ
ていましたから。10歳くらい違いがあった。この間亡くなった岡崎君〔久
彦氏〕は同期でしたよ。

—— 同期は錚々たるメンバーですね。人数も少なくない。

小崎 26人くらいでした。この頃は外交活動が出来なかった時代ですよ。
占領下でね。吉田さんが総理兼外務大臣をやっておられて、外相官邸は今
の白金台でした。今は美術館になっています。我々もそこから大塚の外務
省研修所に通っていましたが、身近に感じていました。

—— 試験勉強はどのようにされたのですか。

小崎 試験勉強は憲法や行政法、経済原論とか。

—— そのころは外交官試験もまだありましたね。

小崎 ええ。あとは語学もありました。相当難しかったですよ。私は前年
は京都で受けようと思っていたけど、ところが寒い時で猛烈なかぜをひい
て、前の日にうなっていました。布団の中で汗をびっしょりかくような状
態で、ふらふらしながら行きましたが、結局だめでした。

翌年は受験の場所は東京でした。ご存知のように、書院には私費と公費
とがありました。公費は各県で、私費は東京に集めて一括して試験をした。
場所は高千穂高等商業学校だったかな。行ったらね、1000人くらい来て
いました。初日はいい加減に書いて出して、空白で出したものもありまし
た。これはだめだと下宿先のおやじに言ったら、まあ酒でも飲めというこ
とで、飲んで寝て、また翌日試験に行きました。やがて一次試験の合格の
通知が届いて、飛び上がって喜びました。二次試験は5～60人はいました。
その時は次官のアイデアか、吉田さんのアイデアか、我々10人くら
いをワンテーブルに座らせて、質問用紙が出てくるんです。たとえば、「経

済関係、貿易関係で何が一番大事か」とか、「戦略的に防衛力はどうすれば一番いいか」などの問題で、みんなで議論しました。集団討論ですね。試験官が座って聞いて採点していました。そういったものが3回くらいありました。

—— その時の面接官はどなただったか覚えていらっしゃいますか。

小崎 次官でした。

—— 対一の面接はなかったのですか。

小崎 ありました。審議官か参事官だったかと思います。

—— 愛知大学でどなたかと一緒に勉強されたのですか。それともおひとりで受けられたのですか。

小崎 愛知大学は外務省に入れと言っていたけど誰も入っていない。私が最初で最後。他の省は知りませんが外務省は誰もいない。専門職でも誰もいない。専門職でもいいから入れと私は機会あるごとに言っているのだけれども、誰も行かない。自信がないのかな。

—— そのころは戦前の東亜同文書院を出身の方で、まだご活躍だった方もおられましたよね。清水董三さんなど。若杉さんや石射猪太郎さんはもう追放になっていたのですか。

小崎 追放になって解除になっていました。

—— お会いになったりしましたか。

小崎 若杉さんとは会っていません。子供さんには電話で話ししましたけどね。奈良県出身の局長がいたのです—堀内干城さんです。堀内さんには終戦後、上海で同窓会があったのです。その時主宰されていて、今後どう生きていくかなどいろいろ話をされていました。

—— 『東亜』という雑誌の中で、岡田晃さんの講演²を読んでいたら、大使が上海におられた時に、岡田さんと堀内さんが上海でいろいろ工作されて、どうやって日本人を引揚させるかなどといった話があったそうです。大使と同じころに上海におられて、大使は堀内さんとお会いになったとい

2 岡田晃「特別講演記録 わが国の中国外交裏面史」(『東亜』第368号、霞山会、1998年)。

うお話しですから、そういった工作とは関係はなかったのですか。

小崎 学生ですから〔なかった〕。

—— 大使は中国派になるのでしょうか。御自身もそう思われていたのですか。

小崎 そうですね。

—— 外務省に入られる時に中国で、あるいはアジアで活躍したいと思ってらっしゃったですか。

小崎 ええ。

—— そのころに中国のスペシャリストのような方はいらっしゃいましたか。

小崎 同文書院出身では、有野さんとか。親父さん〔有野学〕は済南総領事をやっていました。私の一年上でした。もう大分前に亡くなりましたが。

—— 有野学さんはどんな方ですか。

小崎 あまり知りませんが、軍部に反対していろいろ言っただけですが。軍人になぐられたといううわさもありました。そういうことで有名でした。

—— 私共も東亜同文書院出身で戦前に活躍された方にすごく興味がありまして、外交史をやっているとしょっちゅう名前が出てくるのですが、なかなか史料が残ってなくて、日記でもあればいいのですが…。

小崎 最近では有地君〔一昭氏〕というのがネパールの大使をやっていましたが、病気で2年ほど前に亡くなりました。

—— 先ほど名前の出た岡田晃さんは中国派ですか。

小崎 ええ。いろいろな発言をしていますから外務省内では有名でした。戦前は、中国大陸に勤める人が多かったですから、総領事館や分館には大抵、同文書院出身者がおりました。何か事件が起きると彼らが活躍しました。

—— 小崎大使をはじめとして、初期の中国派の方は台湾びいきなのですか。

小崎 そうです。清水董三さんは大分先輩ですが、当時、「蒋介石は大陸反攻をやると言っている。中共はこんなことではだめだよ。そのうちひっくり返る」と言っていました。実際私は、今の中国大陸の状況を見ていま

すと、いつまでもつのかな、と思いますね。10年くらいではないでしょうか。中共政権は。中国そのものは続きますけどね。

—— 外務省入省時に話しを戻しますが、官邸には住み込みなのですか。

小崎 住み込みです。今の外相官邸ですね、白金の。本館があって、吉田さんが住んでいました。裏側に、ずっと長い廊下のついた、昔の殿中、長廊下つきの部屋があるのです。各部屋に二人ずつ。私は田中常雄君〔元駐メキシコ大使〕と一緒に。総理秘書官が夫婦で住んでいて、我々を監督していました。秘書官の名前はなんだったかな。外交官だったのですが。

—— 住み込みは吉田さんのアイデアでしたか。

小崎 そうでしょう。当時はまだ独立していないですから、吉田さんから「独立した後はどうしたらいいか、お前たち勉強しておけ」と言われました。

—— 研修期間はずっと住み込みでしたか。

小崎 期間は半年間でした。研修が終わったら、あとは好きなところへ行けということで。外務省は今の場所でしたが、最初は内幸町のNHKの放送局があったところであって、私もそこへ通いました。

(以下、次号に続く)